

英語の過去完了形との比較から見るフランス語の大過去形
-語りのテキストの分析を中心に-

2023年12月9日（於早稲田大学）

日本フランス語学会第345回例会

宮脇 玲奈（関西学院大学 非常勤講師）

本発表では、Michelle Obama の *Becoming* (2018) と仏語版の *Devenir* (2018) をコーパスとし、テキストにおけるフランス語の大過去形と英語の過去完了形を比較することで、フランス語の大過去形の特徴を明らかにすることを旨とする。

まずテキスト構造と時制の関係を分析するために、Weinrich (1982) の「同質移行」と「異質移行」を用いる。「同質移行」とは同じタイプの時制間、「異質移行」とは異なる時制間での移行を指す。例えば、Weinrich (1982) は発話時点 t_0 と繋がりのある時制を説明の時制、発話時点 t_0 と繋がりのない時制を語りの時制に分類し、「説明の時制から説明の時制」または「語りの時制から語りの時制」への移行を同質移行、「説明の時制から語りの時制」あるいはその逆への移行を異質移行としている。

次に、Declerck (1991) の時間の支配領域を定める「中心場面」という概念を取り入れ、中心場面と諸時制の関係について論じる。Declerck (1991) は現在形や単純過去形のような中心場面となる時制を絶対時制と呼び、過去完了形や過去未来形のような中心場面に従属する場面を相対時制と呼んでいる。この観点から実際のテキストを分析すると、出来事の前後関係は同一の中心場面と従属関係にある時制間でしか作れないことが確認できる。本発表では、中心場面が維持される場合は同質移行、中心場面が変わる場合は異質移行と呼ぶ。

以上の概念を使って、実際にテキストを分析する。英語原文の単純過去形が仏語版では連続して大過去形に翻訳される場合、大過去形が表す事態は中心場面となる事態の詳細を表すようである。このことから、大過去形は一つの中心場面を変えずに維持したまま（同質移行し）、そこに関連づけられる事態を表す働きがあるといえる。このようなフランス語と英語の違いは、未完了を表す過去時制の有無に起因する。フランス語の場合、半過去形という未完了時制があるが、英語の過去時制には未完了時制が存在しない。これが両時制の過去の中心場面を維持する力の差になっており、フランス語の大過去形と英語の過去完了形の使用の差に関係している。

Declerck, R. (1991), *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo, Kaitakusha Co. (安井稔訳 (1995) 『現代英文法総論』 開拓社)

Weinrich, H. (1971), *Temps*, Stuttgart Besprochene und erzählte, Stuttgart, W. Kolhammer GmbH. (脇坂豊他訳 (1982) 『時制論 文学テキストの分析』 紀伊國屋書店)